アジアの山地民の生活世界と地域環境

鹿 野 勝 彦*

Living World and Regional Environment of Asian Mountain People

Katsuhiko KANO *

Abstract

Generally, mountain and hill areas are regarded as being remoter and less developed than lowlands where well-developed urban centers are located, although most dwellers of lowlands are peasants in rural area.

Accordingly, mountain people are considered to be backward, and marginal compared to the inhabitants of lowlands. However, some mountain and hill areas are not mere peripheries of the center, but are borders of plural centers. This means that the inhabitants of such areas are able to fulfill the role of mediators among plural centers. Further, through the unique features of the environment of mountains and hills, secondary centers of specific types come into existence occasionally. On one hand, the environments of mountains and hills prescribe those inhabitants' ways of life, how they cope with and adapt to environments as the subject, and even try to transform them.

Key words : mountain and hill area, remoteness, marginality, borderness, mediator

キーワード：山地，辺境性，周辺性，境界性，媒介者

I. はじめに—住民にとっての山地

本特集第2部の導入として、広大なアジアの山地に住むさまざまな人々の生活と環境との関係の一般的な特徴や、多様なありかたの背景をまとめることを試みる。このような試みはおそらく誰が担当するにせよ、万人の納得するような整理を行うことは不可能な課題である。そもそも山地とはどのような空間を指すのかという出発点においてすら、合意は容易に得られない。したがって以下では、その論旨はもとより、用語の定義や意味付けも、その大半が私個人の、それも本稿に限ったものであることをお断りしておく。

山地とは、なにを意味しているのか。本稿では山地という地域環境を、基本的には平地との対比で理解しておく。その対比は、いわゆる科学的、客観的な指標によるというより、むしろ主としてその地域に住む人々の認識に依拠することとする。したがって本稿の主題としての山地民—山地に住む人々も、平地に住む人々との対比で捉えられることとなる。

ところで山地民の生活する世界は、決してそれ自体として完結しているわけでも、孤立しているわけでもない。山地民の社会が一見平地の社会と断絶しているように見えても、そのこと自体が、後述するように、ある意味で山地と平地の社会の

* 金沢大学文学部

* Faculty of Letters, Kanazawa University

関係のありかたの一形態であることに注意しておく必要があろう。

また山地や山地民、あるいはそれらと平地との関係についての人々の認識といっても、それは主体によって、状況によって、著しく多様である。さらにこういった認識は通時的に変化していくから、そこには時間の要素が必然的にかかわってくることとなる。したがって山地と平地の境界は、常に多少ともあいまいであり、かつ流動的である¹⁾。とはいえ一方では、それぞれの地域において、山地と平地、山地の民と平地の民の違いについての、多くの人々によるある程度共通の、かつ持続的な認識や、それにもとづく支配的な言説も存在するのであり、本稿はそれらをいささか強引に一般化して提示する。

II. 「辺境」としての山地、「周辺」としての山地

山地とはどのような空間であると考えられてきたのだろうか。本稿で扱う多くの地域においては、日本でもしばしばそうであるように、山地とは森林となかば同義語であった。そこはより多くの自然が残された地域であり、国レベルにおいては、文明化された中心地としての平地に対して、開発の進んでいない、すなわち文明化されていない「辺境」であるとみなされてきたことを意味している²⁾。

もちろん平地全体が、山地に対しての中心という位置を占めていたわけではない。そこには国家の政治的支配や経済的な生産、交換、消費の中心であったり、あるいは宗教・儀礼や教育などの中心である諸都市があり、その周辺を一次的な生産者であるとともに、都市に住むエリートの支配と収奪を受ける、いわゆる農民層の生活の場である農村がとりまいている。つまりここでのいう「平地」のなかに、まず「中心」-「周辺」の構造が存在するわけだが、山地は一般には、その平地から孤立した「辺境」として位置づけられることになる。そのような意味では、山地は単にその地形上の特徴から平地と対比されるわけではなく、むしろしばしば農耕地帯の周辺に位置する草原や沙漠なども共通する性格を持つ地域とみなされてきた。

より具体的にみれば、たとえば生業面からは、平地においては灌漑や施肥をとまなう恒常的な農耕が、定住村落に住む農民によって行われてきたのに対し、山地では、焼畑耕作や、家畜の季節移動をとまなう牧畜などがしばしば住民の主要な生業であり、狩猟や採集なども生活を支えるうえで重要な意味を持っていた。また平地の農村は、早くから都市を中心とした国家に統合され、住民はその行政組織や市場構造の中に階層的に組み込まれるとともに、基本的には共通の言語や文字、經典を持つ宗教や社会規範等によって、ある程度まで文化的にも社会的にも統一されていたのに対し、山地ではその辺境性のゆえに、相対的には国家の統制がおよびにくく、その結果として、個別には比較的少数の人口を持つ集団が分散して居住しつつ、固有の文化を維持し続ける傾向が強かった。

こういった山地や山地民のありかたは、多くの研究者や都市に住むエリート層、とりわけ国家の開発政策を決定する官僚などからは、土地利用における生産性の低さ、技術の後進性、国家の行政組織への統合の不十分さ、といった指標のもとに、より未開な存在とみなされ、そしてこういった認識にもとづいて、山地と山地民とは、さまざまな規制や開発政策の対象ともなってきた。たとえば山地住民が行う焼畑耕作は、近年まで多くの地域で、それ自体が常畑や水田での耕作に比べ、生産性が低いばかりでなく、森林という環境を破壊する原始的な耕作の体系とされ、規制の対象となってきた。また山地民が移動しながら、主として森林に飼料を依存して行う家畜飼育も、しばしば森林の劣化を引き起こす要因であり、かつ、より有効に土地を利用している農民の農耕や、国や企業による開発政策の一環としての林業的な森林利用などと対立するものとみなされ、制限を受けてきた。そういった政策の一環として、山地の一定の範囲を、しばしばその住民の意思とはかわりなく囲い込み保護区化するといったことも、生じてきたのである³⁾。

そしてさらには、山地民の伝えてきた固有の文化も、しばしばその言語が文字を持たないことや、

その宗教が文字化された教典を持たないことなどから、後進的なものとして蔑視されるとともに、啓蒙、教化の対象とされてきた。いいかえれば、近代以降、多くの国において、程度や手法の差こそあれ「辺境」としての山地の「周辺化」が進んでいったのである。

こういった都市のエリートによる認識やその結果としての政策などは、平地に住む人々の多くが、今日に至るまで多少とも持ち続けている、山地や山地民に対する認識のありかたとも、けっして無関係ではない。すなわち平地に住む人々は、一方では山地を僻遠の地として放置し、そこに住む人々を見下すと同時に、自らとは異質の理解しがたい存在として、なにほどこかの恐れをもって敬遠するといった、消極的な対応をする。他方では山地が平地と異質な空間であるだけに、たとえば平地では得られない特産物を求めるといった動機によって、そこを利用し、あるいは山地民をみずからの統制下におきながら交流しようとするといった、積極的な働きかけも試みたりする。

これに対して山地の住民は、自らの住む地域と自分たち自身とをどのように認識し、あるいは平地やそこに住む人々との対比を、どのように考えてきたのだろうか。山地民はしばしば自らの日常生活の場である山地を、人口稠密な平原と比べて、豊かな自然を持つとともに、相対的にはあれ「自由」な世界として、積極的に捉えてきた。たとえば山地とは、暑熱の平原に比べれば空気も水もきよらかな、健康的で生活のしやすい地であるとともに、そこでの社会は、平地の都市はもちろんのこと、農村に比べても階層性がゆるやかで共同体的な性格も強く残されていると語られる。とりわけ必要に迫られて平原へ出てきた山地出身の人々にとっては、山地の村は強烈なノスタルジアを誘うかけがえのない故郷なのである。

だがその一方で、山地は、そこに住む人々自身にとっても、開発の遅れた未開の地として意識されることが少なくない。そしてそのことは、山地の人々に平地の文化要素を取り入れ、開発を進めようとする欲求を起こさせるだけでなく、ときには「われわれ」山地民の後進性に対する自己否定

や自嘲の表現をさせたり、あるいは自らが山地を離れて平地に生きる場を求める、少なくとも子の世代にはそれが可能となるような行動を選択させる、といった結果を引き起こしてもきた⁴⁾。

山地と山地民に関する認識は、平地の人々によるものであれ、山地民自身によるものであれ、もともと多義的であるわけだが、近年における開発の進行、とりわけ国際化、グローバル化にともなう山地民社会の国家や市場への一層の組み込みは、そこでの状況をさらに複雑なものとしている。たとえば山地の人々は、一見辺境において自給自足的な生活をしているように見えても、元来自給的な作物栽培をおもに行う平地の農民と比べると、平地と異なる生態系のもとで、地域の特産物の生産を平地の市場を対象として行うことで、むしろ早くからより商品生産的であることが少なくなかったのである。また20世紀後半以降においては、豊かな自然とともに、固有の文化を残す山地民の社会は、しばしばそれ自体が観光の対象として脚光を浴びるようになり、平地の都市や農村の住民に比べてもはるかに多く外国からの観光客のまなざしにさらされるようになったりもしてきた。

山地民にとってこのような状況は、それ自体が多義的である。すなわち自らの住む地が観光地化されることは、その生活がある程度保証されることであると同時に、自らがいわば観光資源として商品化されることをとも意味しかねない。そして、状況が多義的であるということは、必然的に山地民自身の選択や意思決定も多様にならざるを得ないことを意味する。もちろん、かつて、山地民が全体として等質的であったわけではないにしても、こういった近年の状況下においては、その細分化がよりあらわな形で進行している事実は否めないところであろう。

III. 「境界」としての山地、「媒介者」としての山地民

だが山地は、単にある中心地域の辺境ないし周辺としてのみ、位置づけられるわけではない。視野を拡げてみれば、ある特定の山地は、多くの場合、複数の中心地のどちらからも同じような距離

にある、すなわち複数の中心地の支配圏のいずれにおいても境界的な位置を占めている地域とみなすこともできるのだ。そのような場合、山地民は、ある特定の中心地のシステムにしっかりと組み込まれてしまった平地の民と異なり、複数の中心地のどちらに対しても一定の距離を置きつつ、同じようにアプローチをすることが可能な、そして場合によってはそれらを相互に結びつけるような存在でありうる、ということになる。

山地民の生業形態は、一般に平地に住む人々のそれに比べてより多彩であるが、それは単にその生活する空間がより豊かな自然に恵まれているといった、居住地域そのものの環境要因によるだけではない。山地民はしばしば自らが住む村の領域を越え、他の集団の領域にまで広く移動することを通じて生活を維持してきたが、そのなかでも複数の中心地を結んで行う交易活動は、境界性をもつ山地に住むという条件を積極的に利用した、山地民ならではの生業の典型であるといえよう。この場合、山地民は複数の地域を結ぶ媒介者としての役割を果たすわけであり、自ら移動することのない平地の住民は、山地民に依存することで、間接的に外部の世界と接することになる。実際にアジアの各地では、一見きわめて厳しい環境と思われる山地に住みながら、広い範囲を往来して物資を運ぶ交易活動を通じ、おおかたの平地の人々に比べても豊かな生活を築きあげてきたことで知られる交易民を、数多く見いだすことができる⁵⁾。

だが山地民は、いうまでもなく、ただその居住地が地理的な立地条件に恵まれているとか、険しい山地を越えるルートについての知識やそこで物資を運ぶ家畜のような運搬手段を持っているといった、技術的な条件を充たしているだけで優れた交易民となりえたわけではない。彼らが往来する範囲には、しばしば全く異なる自然条件や文化的背景を持つ人々の住む地域が含まれており、またそうであればこそ、それぞれの地域の産物や情報を運ぶことの意味や、したがってその結果として得られる利益も大きかったのだが、それだけにそれにとまなう困難やリスクも並大抵のものではなかったはずである。優れた交易民であるために

は、なによりもまず、多様な自然・文化環境に対応できる適応能力と、幅広く情報を集め、的確な判断を下すとともにすばやく決断するといった、いわゆる企業家としての能力が求められるのである。つまり山地民であれば、どの集団でも優れた交易民であるというわけではないのであり、また交易民とされる人々のなかでも、交易とのかかわりかたには個人差が大きいのが、現実のすがたであった。

だが山地民のこういった活動や、その結果としての豊かさは、人々のアイデンティティーのありかたをも規定する。すなわち、これらの人々においては、さきに触れたような辺境ないし周辺に住む後進的な存在という自己規定とは異なり、より自由で自立した存在という誇りをもって自らを位置づけ、場合によってはそれとの対比で、「自由でない」平地の民を見下しさえしてきたのである。

こういった山地民による交易活動は、近年では一般にインフラの整備やそれにとまなう交通手段の変化によって、その役割を終えつつあるが、それでもこのような山地民集団が培ってきた自信やアイデンティティーのありかたは、そう簡単には失われない。たとえば近年の山地の観光地化に際しても、このような山地民集団は、しばしば自らの文化を誇りうる資源として提示し、さらには資本を投下してより洗練されたものにしていくとするといった、きわめて積極的な対応をする。

ところで境界としての山地は、平地に中心を置く国家にとっては、しばしば国境地帯であることを意味する。そのような場合には、そこには国家にとって守るべき国境線があり、それを越えて往来する山地民のなかには、国家からは、たとえば交易活動を通じて貴重な物資や外貨、さらには情報などを入手することにより、国益をもたらす存在として認められ、その見返りとして、交易の独占権や免税特権などを与えられることもあった。

だがその反面では、山地と山地民の持つ境界性そのものが国の安全を脅かしかねないとして、厳しい監視や統制の対象となることもある。すなわち山地民は、ときに国家によって、その行動、とりわけ国境を越えて行う交易や牧畜のための活動

を制限されたり、さらには人々が住む地域そのものが、外国からの来訪者はもとより、同じ国民であっても、他の地域の住民から隔離されたりもしてきた。つまり山地の境界性の持つ意味もまた、そこに住む住民にとって多義的であるわけだが、個々の地域における状況は、なによりもまず国家の中心との関係のありかたによって、歴史的に規定されてきたといつてよいであろう。

IV. 山地における都市—二次的な中心地

ここまで山地を一般に、平地との対比において、辺境的、周辺的ないし境界的な地域として捉えてきたが、実際にはその各地に、平地のそれと比べれば小規模とはいえ、中心地としての役割を果たしている都市が存在する。それらのなかには、山地民社会のなかから内発的に発生してきたものもあるが、とりわけある時期以降は外部からの影響の下で、二次的に形成されるケースが増えてくる。ここで二次的とは、具体的には、それらの小都市が、山地が平地に中心を持つ国家に組み込まれる過程で、多くの場合もともと平地に住んでいた人々の主導で形成されたことを意味する。

したがっていったん成立した都市においては、その住民は、平地と山地の双方の出身者から構成されることになる。そこでの両者の関係のありかたは、これもいうまでもなくさまざまである。しかし、いずれにせよそれは、従来は一時的、限定的な交流しかなかった山地民と平地民が、常時生活をともにする空間がうまれたというだけでなく、その周辺の村落に住む山地民にとっても、平地の政治、経済、文化などが、直接身近に入り込んできたということを意味する。山地の村の住民は、こういった小都市へ出かけていくことを通じて平地の社会になじみ、さらにはそこを一つのステップとして平地そのものへ進出していくこともあるだろう。

個々の地域における山地社会のありかたを考えるうえで、このような小都市のはたしてきた役割はしばしば相当に大きいが、従来それはどちらかといえば軽視されてきたように見える。そしてこの点を見ていくうえでもやはり歴史的な視点は欠

かせない。

V. ヒマラヤ東部の山地民社会

ここまでアジアにおける山地という空間と、そこに住む人々の社会のありかたの一般的な特徴について、抽象的な表現で述べてきたが、以下では具体的な事例として、ヒマラヤ東部の、ネパール東部からインド、西ベンガル州ダージリン地区、シッキム州にかけての一带を取り上げ、その検証を試みることにする。

この地域では、標高 1,000 m あたりまでの丘陵部は亜熱帯的な、そこから標高 3,000 m あたりまでの中級山地帯は温帯的な、そして標高 4,500 m 前後までは冷涼な亜高山帯の気候・植生帯に属すが、いずれにせよそこは、もともとはネパールやインドの平原や山間盆地、あるいはチベット高原などに立地する中心地としての都市からは遠く離れた辺境であり、それだけにある時期までは、国家の支配や収奪からは比較的自立し、民族固有の言語や慣習を維持する山地民社会が存続していた。たとえば東部ネパールの中級山地を故地とするライ諸族やリンブー、ダージリンやシッキムにおけるレプチャ、あるいは東部ネパール高地のシェルパをはじめとするチベット系の諸民族集団などがそれである。

だがそういった状況は、ネパールでは 18 世紀後半以降グルカ王朝によるネパールの統一とその後の東部一帯での支配の強化、これにともなう山地ヒンドゥー教徒の進出によって、シッキムでは 17 世紀におけるチベットからの仏教徒の進出と支配によって、そしてダージリンでは 19 世紀前半にイギリス・ネパール戦争の結果としてダージリン地区が英領に組み込まれたことによって、大きく変化しはじめる。

たとえばネパール東部の中級山地帯は、今日ではしばしば谷底から尾根筋までが、標高差 1,000 m を越えるみごとな階段状の耕地となっていて見るものを圧倒する。こういった景観は、実は比較的近年、この地域の国家への組み込みにもなって移住してきた、水稲耕作の技術を持つヒンドゥー教徒農民の主導によって形成されたものである。

この過程で中級山地帯の先住民のライ諸族やリンブーは、ヒンドゥー国家ネパールの支配者と同等のカーストに属し、国語であるネパール語を母語とし、文字を使用することもできる、移住者としてのヒンドゥー教徒高位カーストの農民たちによって、しだいに実質的に土地を奪われ、法的にも下位の「民族・カースト」（ジャート）として位置づけられ、従属的な地位に置かれるようになっていったとされる。つまりこの地域の先住山地民は、辺境の民の周辺化という、ある意味で典型的な過程をたどったわけである。しかしその一部は、19世紀後半以降、英領下のインドへの出稼ぎ、とりわけいわゆるグルカ兵、すなわち植民地インド・イギリス軍の傭兵としての雇傭を通じ、その賃金の送金や退役後の年金などによって、いったん失った土地を買い戻すとともに、軍隊で身に着けた知識などを生かし、村でのリーダーシップを取り戻すなど、ある程度失地回復も果たしていった（Caplan, 1970）。

これに対して、16世紀にチベットからヒマラヤを越え、その南面のネパール東部高地に移住してきたとされるシェルパの場合は、むしろネパールとチベットの境界に住むことのメリットを、巧みに利用してきた集団といえよう。シェルパは、たしかにヒンドゥー国家としてのネパールでは、「ボテ」すなわちチベット系民族として低い地位に置かれたが、その一方では従来から利用していたヒマラヤ越えのルートでの交易の独占権をグルカ王朝から獲得し、その交易を通じて富を蓄積してきた。また他方では、20世紀前半以降、イギリス人などが本格的に開始したヒマラヤ登山の高所ポーターとしての職を、出稼ぎ先のダージリンを拠点として半ば独占的に勤めるようになり、そのことは20世紀後半における、ネパールの国際的な観光地化のプロセスで、シェルパがきわめて有利な地位を占めるようになるための前提を築くことともなった（鹿野, 2001）。

ところでここまで何度か触れたダージリンとは、もともとはシッキムの領有地で、一時ネパールがシッキムの大半を占領したあと、イギリス・ネパール戦争を経て、シッキムからイギリスに割

譲された地域であるが、19世紀半ば以降、イギリスはそこに保養地としての町を建設しはじめる。こういった都市、いわゆるヒル・ステーションは、インドの平原部に立地する大都市から比較的アクセスしやすい山地にいくつも作られたが、ダージリンはその代表的な例である。これらの都市は、規模こそ小さいが、平原と結ぶための道路や鉄道などのインフラをはじめ、リゾートとしてのそこで快適な生活を送るためや、さらには教育、医療などに関する諸施設が、高い水準で整備され維持されていた。またインフラの整備は、たとえばダージリンの場合、国際市場を対象とする商品作物としての茶のプランテーションの成立と発展をも促すこととなった（鹿野, 2001）。

ヒル・ステーションの成立は、その周辺の山地に住む人々にとっては、さまざまな物資や労働力の需要が新たに発生したことを意味する。国家への組み込みの過程でしだいに従属性を強めていた、当時のネパール東部中級山地帯の先住民にとっては、そこは魅力的なフロンティアとなった。そしてこれら先住民と同様に、やはりネパール中級山地から移住してきたヒンドゥー教徒をも含む山地出身の諸民族は、そこで平地から移住してきた人々や、さらにはイギリスをはじめとするヨーロッパ出身の人々と日常的に接するあいだに、個別の民族としての出自よりも、むしろ山地民一般（ダージリンの場合であればネパール出身者）というアイデンティティーを強化していくといったこともおきる。だがその過程では、この地域の先住民であったレプチャのように、もともとの生業形態であった焼畑耕作のために土地を利用する権利や、さらには固有の言語、宗教などをしだいに失っていくというケースも生じるようになった（鹿野, 1980）。

VI. おわりに

アジアの山地民の社会のありかたがきわめて多様であることは、すでに繰り返し述べたとおりだが、その多様性の背後には、山地という空間が平地との関係において持っている辺境性とその周辺化、およびその境界性といった特徴がある。だ

が個々の地域の性格は、いつの時点で捉えるかによって、大きく変化する。その場合、国家、政府の政策や、その中心に位置する都市の存在などが山地民に対しておよぼす影響は、しばしば決定的な影響力を持つが、とはいえ山地民自身の主体としての選択、対応のもつ意味も、けっして軽視することはできない (Guha, 1989; Saberwar, 1999)。

さらに近年においては、いわゆるグローバル化の進行にともない、たとえば国際機関による開発事業の展開や国外からのツーリストの増加と山地の観光地化などが進み、状況はいよいよ複雑化してきた。平地住民に比べれば比較的均質的だといわれてきた山地民の社会においても、経済的、社会的な較差の拡大、細分化が進み、その結果として共同体的な性格も薄れてきたとは、周囲からのみでなく、山地民自身によっても、よく語られるところである。1990年代後半以降、ネパールにおいて活発化し、今日も大きな問題を投げかけているマオイストによる武装闘争が、山地民の間で一定の支持を得てきた背景には、こういった変化も一つの要因としてあるのだろう。

だがこのような変化の過程については、民族集団間や宗派集団間、あるいは階級間の対立が生じるといった側面ばかりでなく、たとえばある民族ないし地域集団の内部、さらには世帯レベルでの、性や世代間の関係のありかたの変化を引き起こすといった、従来はあまり注目されなかった、ミクロな変化の側面にも注意を払っていく必要があるのだろう (たとえば, Watkins, 1996; Ortner, 1999)。

当然のことだが、グローバル化が引き起こすローカルな問題やそこでの住民の対応の具体的なありかたは著しく多様であるし、かつそこにはナショナルなレベルの問題も介在することも忘れてはならない。

注

- 1) 文化人類学でこの点を早くより指摘したのはリーチによる高地ビルマの研究であり、そこでは従来異なる空間を領域とする異なる民族と考えられていたカチンとシャンの連続性が明らかにされた (リーチ, 1987)。
- 2) もっともこういった山地の位置づけは、必ずしも世界中で普遍的なわけではない。たとえば中央アンデスにおいては、もともと中心は山地にあり、低地は山地のコントロールを受けていたと考えられている。
- 3) たとえばインドにおいては、植民地時代以降今日まで、森林としての山地の管理を任務とした林務局 (Forest Department) が、そのような役割を果たしてきた (Guha, 1989; Saberwar, 1999)。
- 4) ネパールにおいては、それはしばしば「開発」(bikas)の度合いとして語られることになる (Pigg, 1992)。
- 5) たとえばネパール山地における交易民の居住地の分布についての名和のまとめを参照されたい (名和, 1997)。

文 献

- Caplan, L. (1970): *Land and Social Change in Eastern Nepal*. Univ. of California Press.
- Guha, R. (1989): *The Unquiet Woods: Ecological Change and Peasant Resistance in the Himalaya*. Oxford University Press.
- 鹿野勝彦 (1980): 村落の経済変化と国境—インド、ネパール国境のケース・スタディ。民族学研究, 45, 59-69.
- 鹿野勝彦 (2001): シェルパ ヒマラヤ高地民族の二〇世紀。茗溪堂。
- リーチ, E.R. 著, 関本照夫訳 (1987): 高地ビルマの政治体系。弘文堂。
- Leach, E.R. (1954): *Political Systems of Highland Burma*. G.Bell & Sons.
- 名和克郎 (1997): 伝統交易—ヒマラヤを越えて。石井溥編: アジア読本 ネパール。河出書房新社, 94-101.
- Ortner, S.R. (1999): *Life and Death on Mt. Everest: Sherpas and Himalayan Mountaineering*. Princeton University Press.
- Pigg, S.L. (1992): *Inventing Social Categories through Place: Social Representations and Development in Nepal. Comparative Study of Society and History*, 34, 491-513.
- Saberwar, V.K. (1999): *Pastoral Politics: Shepherds, Bureaucrats and Conservation in the Western Himalaya*. Oxford University Press.
- Watkins, J.C. (1996): *Spirited Women: Gender, Religion and Cultural Identity in the Nepal Himalaya*. Columbia University Press.

(2003年11月1日受付, 2004年2月23日受理)